

〈無意味〉なオブジェとしての伝統工芸品
—ミクロネシア連邦ポンペイ島における
カピングマランギ系住民のハンドクラフト活動から—

鵜戸 聡

**Traditional Crafts as “Meaningless” Objet:
A Case of Handcraft Activities
by Kapingamarangi People in Pohnpei Island**

UDO Satoshi

鹿児島大学法文学部

Faculty of Law, Economics and Humanities, Kagoshima University

要旨

ミクロネシア連邦ポンペイ島のポーンラキード村においてカピングマランギ系住民の工芸品を調査した。ポンペイ島に自生するマングローブやマホガニーなどの木材や象牙椰子の種子を用いて、海洋生物やトカゲ、釣り針、伝統的な帆かけカヌーなどを象った彫刻が販売されていた。編み飾りは、ココヤシの幹の先端の若い繊維を煮て脱色した白いひもを同心円状に編んだ一種の組紐細工で、しばしばアクセントとしてパンダヌスの葉から作った焦茶色のひもを混ぜ、宝貝をあしらって美しい幾何学模様を作りだしていた。カピングマランギの工芸品は、売買へ短絡的に結びついたものと言うよりは、習慣化された無心の製作行為の結果として生じるのであり、その行為も結果も過度に意味を問われることはない。その材質や形象によってさまざまな意味を誘発しつつ、しかもその意味を現勢化する言説を削ぎ落とされているがゆえに、意味の発生する一歩手前、意味生成の罅に立ちずさんでいる。

ミクロネシア連邦の首都パリキールが置かれたポンペイ島の北西部、岸壁の上に拓かれたポーンラキード村 (Pohnrakied/Porakiet) は、日本統治時代の 20 世紀初頭に、遙か南方のカピングマランギ環礁から移住した人々のコミュニティである¹。

カピングマランギ環礁は年 4 回の定期船で片道 3 日を要する僻遠の孤島であるものの、ミクロネシア地域におけるポリネシア系の飛び地として知られており (いわゆる「辺境ポリネシア」)、ポーンラキード村は在外カピングマランギ人の集住地として独自の言語や習慣を保持している。この村の特産はカピングマランギ環礁より伝えられた工芸品であるが、それは彫刻作品と編み飾りに大別され、前者は男性、後者は女性によって製作されている²。

彫刻はポンペイ島に自生するマングローブやマホガニーを用いて大小さまざまな海洋生物 (とりわけサメ [hogoulu]・イルカ [gonau]・クジラ [tohora]・カメ・カジキマグロ [takura] など) を象ったもので、木材を切り出し、鑿で大きく形を整えた後に、非常に丹念にヤスリがけをして完成させる。より小さな作品としては、象牙椰子の種子 (その名の通りやや青みがかった乳白色をした艶やかな素材) をイルカ・トカゲ (kimo)・釣り針 (matau)・タコ (bilibili) などの形に彫り出したものがあり、黒いひもを通してペンダントにする (材料が小さいため、まだ眼の良い若者が特にこれを作るとのこと)。また、細工物として、伝統的な帆かけカヌー (waka) の模型も少数製作されている。

編み飾りは、ココヤシの幹の先端の若い繊維を煮て脱色した白いひもを同心円状に編んだ一種の組紐細工で、しばしばアクセントとしてパンダヌスの葉から作った焦茶色のひもを混ぜ、寶貝をあしらって美しい幾何学模様を作り出す。小さなものはカメを象ることが多く、しばしば甲羅を立体的に編み、パンダヌスで色を加えつつ中心に貝を配する (寶貝は色と形の隣接性に基づく甲羅の換喩である)。大きなものは壁飾りとして製作され、パンダヌス・寶貝に加え、時にはイルカなどの木彫レリーフが嵌め込まれることもある。

¹ GONIWIECHA (2009) によれば、3 年続いた旱魃によって約 90 人の死者が出たため、1918 年に当局が約 90 人をポンペイに移住させた。現在では 1,000 人を越える住民が暮らしており、カピングマランギ環礁の人口約 600 を遙かに上回っている。なお、戦時中のカピングマランギ環礁にはパプアニューギニア方面に向かう給油基地が置かれ (ポンペイよりもラバウルに 100 マイルほど近い)、現在も当時の遺物や戦跡が残る。また、センセイ (sensei)、クルマ (kulumaa)、リヤカー (liaga) などの日本語も残存しているという。なお *Outer Islands of Pohnpei: Factsheets and Maps* ではカピングマランギ環礁の人口は 350 となっており、ポーンラキード村の人口も筆者の聞き取りでは 700~800 という答えが多かった。

² ここではポーンラキード村で製作・販売されている土産物のみを取り上げるが、その外に、ココヤシの繊維やパンダヌスの葉で編んだ帽子やマットなど、多彩な日用工芸品もカピングマランギ環礁で製作されており、その詳細は BUCK (1950) や HAMNETT (1970) に詳しい。

これらの工芸品の販売所としては、町が目抜き通りに比較的大きな土産物店 **Simon Market** が一軒あるほか、ポーンラキード村内にも大小二軒の土産物店および即売所を兼ねた工房（8時から23時ごろまで適宜寄り集まって作業しているという）が一軒ある。しかし、グアムなどに比べてマイクロネシア行きの航空運賃は極めて高値であるため、ダイビングや戦跡ツアーに多少の需要がある外は、観光業は非常に脆弱であり、土産物を購入する観光客は絶対的に不足している。編み飾りは島内の公的施設やホテル、レストランなどで壁掛けとして用いられており、マイクロネシア国内での需要がある程度見込めるものの、重くかさばる彫刻作品を購入するのは比較的年配の外国人が多いとのことであり、その売れ行きはかなり低調である。そもそも村内の販売所には店員が常駐しておらず、まれに客が来ると誰かが店主（あるいはその家族）を呼びにいくという状況である。筆者は調査中に一度だけマーシャル諸島からバスケットの試合に訪れた女子高生たちに工房で遭遇したが、ミニバンで直接乗りつけた彼女たちは、ほんの10分ほどでペンダントのみ購入してあつというまに去って行った。

手間と時間がかかる上に売れる見込みも少ないとすれば、彫刻作品を製作するという行為にはいったいどのような意義が見いだせるのであろうか。そもそも現金収入の手段が限られているゆえに、販売の可能性が少しあるだけでも無意味ではないだろうし、カピングマランギ・コミュニティの内部で年長者の援助を受けながら自分のペースで作業を行うことは、外部に働きに出るよりは精神的負担の少ない仕事でもあるだろう。教会の目の前の工房でコーヒーを飲み、おしゃべりしながら作業に励んでいる様子からは場の社交的な性格も窺える（もちろん自宅で製作して店に卸す者もいるが）。大きな方の土産物屋の前では女性たちがお喋りをしながら編み飾りを作る風景が見られ、日曜日にはビンゴ・ゲームが行われていた。ただし、強いモチベーションやインセンティブが働いているようには思われない。

一方、これらの工芸品はほぼカピングマランギ人のみによって担われており、彼らの文化的な誇りともなっている。ポンペイ人に技術を教えるために公立の工芸学校も開かれているものの、毎年生徒はほんの数人で、そのほとんどが長続きしないという。とはいえ、このカピングマランギ固有の伝統文化を現在特徴づけているのは、むしろ「意味の不在」とも言うべき現象なのである。「なぜこれを作るのか」という問いに対して職人たちは一様に「意味はない」「昔からやっているから」と答えるのであり、作品のモチーフがサメやイルカであることにも意識的な意味づけは行われていない。ポリネシア系の彫刻技術はカピングマランギ環礁から途切れることなく継承されているものの、個々のモチーフが本来有していただろう象徴的な意味はほぼ忘れ去られている（おそらく民話が忘れられつつある）。当然ながら近年観光人類学でしばしば論じられるような「観光体験の真正さを保証する物語」はほとんど不在である。

カピングマランギの彫刻作品は、売買へ短絡的に結びついたものと言うよりは、習慣化された無心の製作行為の結果として生じるのであり、その行為も結果も過度に意味を問われることはない。さまざまな海洋生物の姿を写した彫刻作品は、いわば〈無意味のオブジェ〉として見る者の前に立ち現れて来る。しかも、サメの彫刻には

本物のサメの歯が取り付けられているのだが、姿を写し取った木彫りのサメに、さらに現実のサメの堤喩として歯が与えられるとき、形象の模写と実体の堤喩的発現という二筋の文脈がその〈写し〉の次元に導入される。これらの彫刻作品は、その材質や形象によってさまざまな意味を誘発しつつ、しかもその意味を現勢化する言説を削ぎ落とされているがゆえに、意味の発生する一歩手前、意味生成の閾に立ちずさんでいるのである。

引用文献

- BUCK, P. H. 1950. Material Culture of Kapingamarangi, Berenice P. Bishop Museum Bulletin 200, 291 pp., Berenice P. Bishop Museum, Honolulu, USA.
- GONIWIECHA, M. C. 2009. Japanese Influences on Kapingamarangi, 17 pp., Unpublished Research Manuscript.
- HAMNETT, M. P. 1970. Crafts of Kapingamarangi, 15 pp., Office of Economic Development, Trust Territory of the Pacific Islands, Ponape, FSM.
- ISLAND RESEARCH AND EDUCATION INITIATIVE 2013. Outer Islands of Pohnpei: Factsheets and Maps, 12 cards, Island Research and Education Initiative, Palikir, Pohnpei, FSM.